

# 看護学生の「死のイメージ」の変化 ～読書による死生観確立への影響について～

## How were Our Student Nurses Changed their “Image of Death” by Reading.

成人・老年看護学 落合 清子  
浦和医師会看護専門学校 長井美佐子

### 【要旨】

看護学生の「死のイメージ」を短編小説の読書感想文から抽出し分析した。読書前の学生の「死のイメージ」は肯定的なイメージが15.1%、否定的なイメージが66.6%、その他のイメージが18.3%であった。読書後には肯定的なイメージは45.2%、否定的なイメージは35.7%、その他のイメージは19.1%であった。さらに、自己の死生観の確立に影響すると思われる広がりをもたらした。看護職を志向する学生への影響が大きいことが確認され、また学習教材として文学作品がもつ大きな可能性を見出した。

キーワード：死のイメージ 死生観 感性 尊厳死 読書感想文

### 1. はじめに

医療を取り巻く環境は著しく変化し、1980年代にはターミナルケアやホスピス、バイオエシックスといった用語が身近に語られるようになった。1990年代には保健師助産師看護師養成所指定規則の教育課程の中に「ターミナルケア」が位置づけられた。時を同じくしてターミナルケアの専門雑誌が登場し、学際的な議論の場として研究会・研修会・学会が設立された。また「死の臨床医学」、「終末期医療」の学問分野が誕生し、死は忌み嫌うもの、死を医療の敗北とは見做さず積極的に死を捉え、『看取り』から『支える医療』への新たな潮流となった。看護基礎教育においても、死の看取り教育のプログラムとその教授方法の研究が盛んになった。

学生は入学して以来、人間をどう捉えるか、生命の誕生と死、健康と健康逸脱、人間の成長発達と発達課題、生活と生活の質、看護とその機能等、次々に新しい世界を学習する。

筆者らの授業の中で学生に「死のイメージ」や「死生観」について問うと例外なく困惑し、死への不安や恐怖、無関心さを表すと同時に一方で、楽天的で軽い表現や今は考えたくないといった答えも聞かれる。死を成長発達の一つの過程として前向きに

捉えられることは稀である。

そこで、「積極的に死を認識」できるための読書課題を与えた。本レポートは1年次後期の学生による読書感想文から「学生が表現した死のイメージ」について明らかにし、自己の死生観の確立への影響について考察した。

### 2. 目的

読書を通して学生の死に対するイメージが、どのような広がりをもせたか、また、自己の死生観に影響を及ぼすと思われる学生の死のイメージについて明らかにする。

### 3. 研究方法

研究対象：看護学生112名（短期大学生82名・専門学校生30名）で、研究目的を説明し協力を得た学生（1年次後期の成人看護学概論の単元「ターミナルケア」の受講生）。

調査方法：初回授業の導入部で記名による記述式アンケート調査及び自己学習課題「深沢七郎著 楢山節考<sup>1)</sup>」の読書感想文の提出を求めた。

分析方法：提出された読書感想文から「死のイメージ」と「自己の死生観」に関連すると判断した記述

を抽出し「肯定的」、「否定的」、「その他」に分類した。更に、自己の死生観の確立要因である「死を自然の摂理として厳粛に捉えられる」、「終末期にある対象者と人格的に向かい合える」、「希望と勇気を持ち続けられるような支えになれる」の3点から学生の「死のイメージ」表現と「自己の死生観」への影響について考察した。なお、112名の感想文からの抽出作業は看護教師3人が別々に行ったものを合同で吟味し、抽出内容の重複や欠落を調整した。

＜教材「楢山節考」の要約＞

深い山間の貧しい村の掟を背景とした短編小説である。70歳を迎える主人公のおりんには、楢山に行く日が近づいている。若い時分のおりんは、村一番の器量よし、老いても前歯一本も欠けずに元気に生きてきた。食糧のない村で、ひ孫ができてはいっそう居づらい。お山まいりに備えて、3年も前から菘を織り、お山まいりの時の振舞酒や御馳走の蓄えをきっちり済ませ、倅の辰平には後妻を隣村から迎え、その嫁にヤマメ捕りを秘伝し、孫の嫁をも受け入れ、自らは前歯を石臼にぶっつけて欠き老婆化する。あとは山へ行くだけとなる。雪の降る前に辰平の背板にしょわれて家を出る。山の岩陰にはあちこちに死人(しびと)や骨、からすが舞う。背中のおりんは一言もいわない。辰平は涙を流しながら山を登る。おりんは死人のいない岩陰にくると手で合図して背板から降り、菘に座り辰平に帰れと身振りする。辰平は涙しながら山を下る。途中、雪が降り出してきた。辰平は掟を破っておりんのところに戻って、「おっかあ、ふんとに雪が降ったなァ」の一言をかける。おりんは頷き、「来るな、帰れ」と手振りした。辰平は脱兎のように家に戻った。家では孫たちとひ孫を宿した嫁がおりんの残していった腰帯やどてらを身につけていた。小さい子供たちはお山まいりの歌をうたっていた。辰平は家族がおりんはもう帰ってこないのだと承知したと思った。辰平の嫁の姿だけがなかった。

＜用語の定義＞

1) 死生観

生と死に関する考え方、見方である。その中味は死観・生命観・死後観・肉体観・霊魂観等が複合している。そして死後の世界に対する観念が重要な部分を形成している。身近な宗教、自然観察、人生体

験、日々の暮らし等から形成される<sup>2)</sup>。

2) 感性

物事を深く心に感じ取る働きのことであり、外界からの刺激をうけとめる感覚的能力。具体的には人の心の機微を捉える目や自然界の営みを真摯に受け止められる力<sup>3)</sup>。

3) 尊厳死

本人の意思が尊重される形で人格の尊厳が最期まで保たれること。健やかに生きる権利、安らかに死ぬ権利を自分自身で守ることの行為(自己決定の権利)を含む。－日本尊厳死協会－

具体的には、助かる見込みのない末期患者に対して積極的な治療や延命処置をすることをやめ、人間としての尊厳をもって死を迎えられるようにすること(消極的安楽死の概念を含む)<sup>4)</sup>。

4. 結果

1) 初回授業の導入部分におけるアンケート結果(設問項目①～⑥)

①の設問「身内の死を体験しているか」では、「はい」と答えた者は67名(59.8%)、「いいえ」と答えた者は40名(35.7%)、「無回答」5名(4.4%)であった。

②の設問「人の死について最近考えたことがあるか」では、「ある」と答えた者は102名(91.0%)、「ない」と答えた者は8名(7.1%)、「無回答」2名(1.7%)であった。

③の設問「自分の死について最近考えたことがあるか」では、「ある」と答えた者は81名(72.3%)、「ない」と答えた者は31名(27.6%)であった。

④の設問「来世についてどのような考えを持っているか」では、自由記述で、「靈魂の存在を肯定する」が92名(82.1%)、「死はすべての消滅である」が14名(12.5%)、「無記述」が6名(5.3%)であった。

⑤の設問「近い将来に看護者として死に遭遇した時、死についてどのように思うか」では、自由記述で、「逃げ出したい程怖いと思う」98名(87.5%)、「ただ身体が震えて何もできないと思う」19名(16.9%)、「すべてが終わってしまったのだと思う」14名(12.5%)、「虚しさと悲しさ、辛さが込上げてくる」10名(8.9%)、「呆然としてしまい何も考えられない」、「家族の辛い思いに耐えられない」、「泣き出してしま

うかもしれない」は、各3名 (2.6%)、「看護師を辞めてしまいたくなるかもしれない」2名 (1.7%)、「これで悔いは無かったのかな」、「楽になれたのかな」、各1名 (0.9%)、「無回答」2名 (1.7%)であった。

⑥「死について、あなたのイメージを短くキーワードで列挙してください」では、複数回答結果を以下に示した。列挙されたキーワードのうち重複しているものは整理し、同意語のものはまとめた。その結果、33単語になった。内容として生物学的変化 (4)、心理的描写 (5)、習慣的な事柄 (4)、場所や情景 (11) 架空のこと (6)、死の原因 (3) であった (表1)。

これらは更に「肯定的イメージ」として再生・お星さま・風・天国・天使で15.1%、「否定的イメージ」として冷たい死体・息苦しい・痛み・骸骨・怖い・無念・悲しみ・お葬式・死後の処置・火葬・喪服・お墓・底なしの谷・真っ暗なトンネル・霊安室・ひとだま・幽霊・ブラックホール・閻魔様・がん・事故・自殺で66.6%、「その他のイメージ」として靈魂・お寺・教会・病院・仏壇・花園で18.3%に分けられた。

表1. アンケート結果：死のイメージ (33単語)

①生物学的変化：「冷たい死体」、「苦しい」、「痛み」、「骸骨」
②心理的描写：「靈魂」、「悲しみ」、「怖い」、「無念」、「再生」
③習慣的な事柄：「お葬式」、「死後の処置」、「火葬」、「喪服」
④場所や情景：「お墓」、「底なしの谷」、「霊安室」、「真っ暗なトンネル」、「お寺」、「教会」、「病院」、「仏壇」、「お星さま」、「風」、「花園」
⑤架空の事：「ひとだま」、「幽霊」、「ブラックホール」、「閻魔様」、「天国」、「天使」
⑥死の原因：「がん」、「事故」、「自殺」

2) 読書感想文から抽出された「死のイメージ」(表2～表4)

112名の感想文から死のイメージに繋がると思われる文脈が186件抽出された。さらに記述内容の重複を整理し43の文脈単位になった。これらの死のイメージを「肯定的イメージ (45.2%)」・「否定的イ

メージ (35.7%)」・「その他イメージ (19.1%)」の3つのカテゴリーに分類した。

## 5. 考察

看護基礎教育における看取り教育は、看護技術項目「死後の処置」として位置付けられてきた長い歴史がある。

看護学生が臨床実習や卒業後において死に遭遇しても途方にくれたり逃げ出したりしないように、死に対する確かな意識を育てることは必須である。

在宅での死の看取りが激減し、病院や施設内での死が70% (がんは94%) を超えるという社会環境の下に育った学生は自己の死生観を構築するための実体験が乏しい。アンケート結果にみられた「身内の死の体験」は60%の学生がしていても直接的なかわりの機会は少ないと思われる。また、「人の死について考えた」が高値 (約91%) を示し看護学生としての学習体験が反映されたものと考えられるが、一方では、「自分の死について考えた」は約72%であり、「死に遭遇した時には逃げ出したいほど怖いと思う」約88%という現状からは揺れ動く学生像がうかがえる。寺本が述べているように「逃げ出したい気持ちがあつてこそ、とどまる勇気が育つ」<sup>5)</sup>のである。それゆえに看護者をめざす学生に自己の人生観や生命観、死生観を育てて行こうとする「力」が切実に求められているといえる。

それには哲学や宗教、人間学、環境学等をベースに、自己を取り巻くさまざまな日常的な事象の中から「ひと」、「いのち」、「生きる」、「からだ」、「くらし」、「家族」、「地域」、「規範」を学習し、さらに、「生命観」、「死生観」、「自然観・宇宙観」の構築という根幹的課題について常に興味深く学ぶ姿勢を育成していくことが大切である。荒尾の実態調査<sup>6)</sup> (2002年)によると、訪問看護師 (30～40代) 4989人の「死に関する教育を受けた体験」の約21.7%が看護基礎教育で、75.8%は卒後教育である。このようなことから看護基礎教育における死の教育の必要性は大きい。

読書感想文から抽出された「死のイメージ」の表2「肯定的なイメージ (45.2%)」から、死にゆく人の人生観、死生観、自然・宇宙観、信仰などが死に向かって凜として生ききる原動力となっている事を感じとっている事が分かる。また、表3「否定的なイ

表2. 読書感想「肯定的なイメージ」

- ・おりんは死を受け入れていた
- ・お山まいりという村の掟に従って着々と死への準備をしていた
- ・おりんの死は雪に包まれ静かに自然に還ることだと思えた
- ・からすの餌食になるのは酷いがこれが自然界の掟なのかと思えた
- ・雪が降って安楽な死（眠るような）が迎えられると思った倅の気持ちに感動を覚えた
- ・雪解けとともに春を迎える山々の美しさが想像でき、おりんは静かに自然界に還れると思えた
- ・どのように生きてきたかが、どのような死に方をするかに繋がると思えた
- ・死にゆく人には、その人自身が考える、ふさわしい姿があることを知った
- ・掟とはいえ、どのように死を迎えるかは本人の意志だと思えた
- ・死は、個人の絶対的な体験であるから、悔いを残さない締めくくりをしたいと思えた
- ・おりんの死はいろんな意味で世代交代であり、家族への愛だと思えた
- ・おりんの姿に、凜とした生き方がみえて、これがおりんの死生観だと思えた
- ・家族の受け止め方に世代間の違いがあるが、なぜか其の事が希望に思えた
- ・どんなに貧しくとも振る舞い酒やご馳走で、別れをするという慣わしの意味を考えた
- ・不気味なお山まいりの信仰の中で、凜として生きる、おりんに大きな存在感を感じた
- ・どんな事を思い思いながらたった一人で死を迎えるのだろうか、人間の強さを知った
- ・最期まで思いやりや希望、信念を持ち続けている、おりんに感動した
- ・貧しさや掟という威圧の中に置かれても、凜として自分を生ききるという姿に感動した
- ・最期まで家族の温かな愛情を確認できて死ぬことの素晴らしさがあった

表3. 読書感想「否定的なイメージ」

- ・掟とはいえお山まいりは脅威、恐怖、不気味である
- ・やはり掟破りをするほどの恐怖がある。掟という名のもとでの殺人である
- ・死は常に多くの未練や苦痛をもたらすものである。途中で逃げ出す人がいてもしかたない
- ・このような死は自然ではない。ただ残酷である
- ・掟によって発生する死は、他にもある（切腹、敵討ち、戦争、死刑）と思えた
- ・老衰や病気、災害・事故、自殺、戦争…死はすべて受け入れがたい、全ての諦めである
- ・からすや獣の餌食となって、死にゆく姿は残酷で耐え難い
- ・貧しさとはいえ、若い者が生きるために老人の長生きが否定されることは許されない
- ・この家族にはそれなりの絆はあるが、孫たちの態度は身勝手である
- ・掟は人が人を監視し、拘束する絶対的な力を持っていて恐怖（現代にも重なる）
- ・餓死、凍死、鳥や獣の餌食、極限状況下の孤独感と意識の喪失の死の恐怖
- ・人が人を捨てる、肉体が朽ち果てるという死の過程の恐怖
- ・衰弱して鳥についばまれる光景は地獄絵と重なり強烈すぎる
- ・掟など破ってしまえばよいのに破れない人間の弱さや愚かさが虚しい（自己中心的妥協）
- ・掟の猛威が人間の無力さをあざ笑っているようにみえる（おりん以外の人の存在感がない）

表4. 読書感想「その他のイメージ」

- ・現代社会に通ずるものがある (老人施設、孤独な老人の1人暮らし)
- ・貧しさ故の規律を受け入れて生きる遅しさと同時に平凡な人間の姿がみえた
- ・豊かな現代に生き、そして死んでいけることの幸せを感じた
- ・不気味な烏の黒と初雪の純白さが、生と死のイメージを強烈なものにしていると思えた
- ・真っ白な雪に包まれて眠るように凍死するおりんの死は安楽死と同じだと思えた
- ・人間の作った掟と大自然の摂理とが重なって見えてきて死に対する違った見方が生まれた
- ・死は孤独な作業という意味がいろいろな視点から考えられると思えた
- ・死に向かいあうには掟を越えて、愛こそが絶対という作者のメッセージがあった
- ・文学作品の中で死を深く考えることができた

メージ (35.7%)」からは、アンケート結果に見られる死に対する否定的イメージとの重なりが多い事が分かる。また、諦めの死や社会的規制による死、死に場所の選択 (在宅・病院・施設等) といった掘りをみせている事が分かる。表4「その他のイメージ (19.1%)」からは、文学作品を味わう「鑑賞」という視点の広がりがあること、また、現代社会の諸問題に重ねて死のイメージを発展させ死生観に影響する人生観や自然観、人間観が表現されている事が分かる。

次に「死のイメージ」が自己の死生観の確立にどう影響を及ぼすかについて、死生観の確立要因に基づいて考察する。

#### ①死を自然界の摂理として厳粛に捉えられる

アンケート結果にみられた「死のイメージ」には「花園、天国、天使、星、風、再生」以外は、負のイメージにつながる表現が約8割強を示した。学習を積んできた学生は「死は絶対なもの」と周知しているが、死はまったく自然なことという考えに支えられ死の恐怖から解き放たれるに至ってはいない。つまり看護学を半年間学び、看護職への夢や期待を抱ける環境にいても、それほど死について知り得ていないということである。死は生物的、社会的、精神的、霊的な営みの全てを喪失することである。とりわけ霊的な営みを失うことは自己を喪失することであるから最も恐ろしいとの認識を多くの人がもつ。だから、死が近いことを意識したとき、現世での自己存在の限界を来世の延長線上に置き換え、魂の永遠性を信じることで希望と勇気を与えられると言われている。このことは「死後の生の存続を確信し死に対する恐怖がなくなり、死後の問題で心が

き乱されることがなくなった」と精神科医のレイモンド・ムーディは、著書『かいま見た死後の世界』のなかで述べている (1975年)。このような思考の広がりには、日頃よりどのような自然観や宇宙観、宗教観を育てておくかが大きくかかわっている。学生の表現にあった「雪に包まれ静かに自然に還る。…雪に包まれ眠るように…。からすや獣の餌食… (中略)自然界の掟なのか、倅の嫁にヤマメ捕りを…。お山信仰の中で凜と逝き切る人間の存在感…。雪解けとともに再生する命への希望…。お山まいの恐怖…」などは、大自然の営みに包まれている人間の存在を感じ、自然と共存・共生し、寄り添って生きる人間観を学習している。

#### ②終末期にある患者と人格的に向かい合える

ターミナルケアは喪失と悲嘆への看護、痛みへの看護、その人らしく最期まで生きることへの看護などが主題である。いかなる状況にあっても死にゆく人の心理的反応は複雑で捉え難いものである。

キューブラ=ロスにより提唱された「死の受容過程」は、そのような複雑な心の内を受け止め、近くことへの確かな手がかりを与えてくれた。

怒りや拒否、抑うつといった心理反応の時期は熟練看護師でも関係性を持つことが困難な場面がしばしばある。だからと言って学生という立場であっても看護実践の場で死にゆく人から逃げ出したり、途方にくれたりしてよいとはいえない。対象者と人格的に向かい合うためには自己の人生観や生命観、死生観によって、自己の死を公平であり、絶対であると受け入れ、自己と他者とは同じ弱い人間同士であることを覚えることが必要である。学生の表現「どのように生きてきたかがどのような死に方…。…ど

のような死を…本人の意志、死にゆく人にふさわしい姿…。個人のたった一度きりの絶対的な体験…」には、そのような対象者と向かい合う自己の姿を読み取ることができる。

③希望と勇気を最期まで持ち続けて生きられるよう支える

「死の受容過程」は、そのどの段階においても「希望」を持ち続けるものであることを提示している。つまり、最期の瞬間まで希望を持ち続けられるために勇気を失わないようにする支援が必要であるということである。「嫁にヤマメ捕りを秘伝し…、ひ孫の誕生を祝し…、雪が降ることを確信し…、念仏を唱え…」という表現から、学生はおりんの姿に希望と勇気を感じとっていることが分かる。

## 6. まとめ

深沢七郎の「檜山節考」は日本人の死生観を考える時によく活用される短編小説である。今回これを教材として選択したのは貧しい山村を舞台に古くからの棄老伝説に基づいているということ、そして共同体の決定が個人を超えて絶対的なものとされていることが前提になっているということの2点からである。それらを読み取ってこそ、主人公おりんの生きざまに深い感動を覚えることができると期待したからである。また、単なる伝承ではなく尊厳死や安楽死の問題と重なり、形を変えて個人の決定権が活かされていて現代にも十分に通ずるものがあると考えられたからである。

読書後、学生の「死のイメージ」は明らかに次の①～⑤という拡がりをもって表現された。また、それは自己の死生観に大きく影響していくと思われる「感性が育つ」ことでもある。①死に直面していても、おりんが倅の言葉『おっかァがあんなに力んで言っていたように、ふんとに雪が…』を受け、お互いの思いを確かめ合って『幸せもんじゃ…。してやった!』と言わんばかり、そこにはきつと微かな笑みがあったのではないかと想像した学生がいたこと、②雪に包まれ凍死していく中に全てを真っ白に消してしまう自然の力の大きさと春を待つ希望の姿を描いた学生がいたこと、③ご法度と思われている村の掟をも破って、ことばを掛ける愛

の力と、掟をまもり続ける絆の強さを感じ取れた学生がいたこと、④掟の全てを受け入れ、家族を受け入れ、お山の神の御心を信じ終焉を自分でデザインした主人公の芯の強さに打たれ、「おりん」という名を付けた作者の意図を感じ取った学生がいたこと、⑤孫の嫁はひ孫を妊娠した、その児のためにも早い時期にお山参りを決めた、おりんのこころの広さに自己犠牲を伴う愛と希望を感じ取った学生がいたこと等が明らかになった。

今回、たった一つの文学作品を通してではあるが、多くの学生がそれまでの死に対する負のイメージを払拭し、死にゆく人が希望と夢を描きながら死と向かい合えるのだという、新たな感動体験をしている。3つの視点から考察をした結果、学生は死は公平で絶対的体験であり、それ故に自然界の摂理の中に人の生も死も存在し、今を生かされている自己を覚えることであると気づくことができた。作品中に対照的な二人の生きざま(死の受け入れ方)がリアルに描かれていて、自分だったらどうするかを考えることができた。「死を如何に教材化するかと力むばかりではなく、日々の生活の中で喪失感に耐える力の免疫作りの試練を与える」<sup>7)</sup>ことが大事である。

美しく、ダイナミックで、即興的に感動できるメディア教材は学習を促進させ、良い成果を上げている。しかし、一方では活字離れが危惧されている現状がある。この度の学習課題は、学生にかなりの負荷をかけたことは言うまでもない。それは多くの学生の直接的な反応からも十分受け止められた。

しかし、読書後には、これらの拒否的反応はすべて吹き飛んでいた。読み終えた達成感と読み取れた内容への感動があった。さらにその感動を感想文に表現できたという満足感があった。その満足感は胸中にとどまらず、級友間で分かち合い、死を語り合い、中には旅の途中で信州檜山駅に降り立った等々、さまざまな行動になって現れた。つまり、看護学生として人間の生死への深い関心を持つことができたのである。

## 7. おわりに

「死とは何か」という問いには、どの学生もそれぞれの成育過程でさまざまな刺激を受けている。しかしながら、死に真正面から向かい合うほどの体験

はそう多くない。この度の読書課題は、死にゆく人の看護を学習する導入部分での試みであったが、予想をはるかに超える結果を得た。

しかし、本研究はまだ学習教材としての文学作品がもつ可能性を気づかせてくれたにすぎない。また3つのパターンに分類した学生の反応についても、それぞれの特徴と関連性を明らかにするための分析にとどまる。今後はこの結果を学生にフィードバックし、学生によるディスカッションを取り込んだ追及をしていく必要がある。

## 8. 引用・参考文献

- 1) 深沢七郎：楢山節考、岩波新書 1956
- 2) 窪寺俊之：系統看護学講座別巻ターミナルケア、P157～171、医学書院、2004
- 3) 村松明監修：大辞泉、小学館、1995
- 4) 藤腹明子他：系統看護学講座別巻ターミナルケア、P5～7、医学書院、2004
- 5) 寺本松野：その時そばにいて、死と看護をめぐる論考集、p 97、日本看護協会出版会、1985
- 6) 荒尾晴恵：終末期を支えるナースに必要な条件、訪問看護と介護、vol.8.No.6.P469～474 医学書院、2003
- 7) 天野幸輔：一般家庭でデスエデュケーションを、ターミナルケア、vol.3.No.2 P139～142、三輪書店、1993
- 8) 日野原重明他：いのちの尊厳、同朋舎、1998
- 9) 藤岡寛治：感性をそだてる看護教育とニューカウンセリング、医学書院、1995
- 10) 奥田いさよ他：ターミナルケア、川島書店、1995
- 11) 平山正美他：身近な死の体験に学ぶ、春秋社、1989
- 12) アルフォンス・デーケン：死を考える、メヂカルフレンド社、1986
- 13) 多田富雄他：生と死の様式、誠信書房、1991
- 14) アルフォンス・デーケン：死を教える、P.961、メヂカルフレンド社、1986
- 15) 日本看護協会：尊厳死、講談社、1991
- 16) ターミナルケア：vol.10.No.4、三輪書店、2000
- 17) ターミナルケア：vol.3.No.2、三輪書店、1993
- 18) 佐藤智：在宅での看取り過去・現在・未来、ターミナルケア、vol.10.No.6、三輪書店、2000
- 19) 沼野尚美：スピリチュアルケアとはなにか、ターミナルケア、vol.6.No.3、三輪書店、1996
- 20) 成田薫：安楽死・尊厳死をどう理解し考えるのか、ターミナルケア、vol.5.No.2、三輪書店、1996
- 21) 訪問看護と介護：vol.18.No.6、医学書院、2003
- 22) 鈴木康明編：生と死から学ぶ命の教育、現代のエスプリ、5月号、至文堂、2000
- 23) 菅原邦子：末期癌患者の看護に携わる看護の実践的知識、看護研究、vol.26.No.6、医学書院、1993
- 23) 大塚廣子：末期にある在宅療養者とその家族の看護、看護教育、vol.45.No.11、医学書院、2004
- 24) 青山誘子：学生の感性は無限大、看護教育、vol.32.No.13、医学書院、1991
- 25) 小松奈美子：臨死体験一時空を超えた世界をめぐって、Quality Nursing、vol.3.No.5、文光堂、1997
- 26) 小松奈美子：日本人と生命倫理、Quality Nursing、vol.3.No.9、文光堂 1997
- 27) 恩田和世：無用の用の意味、看護教育、vol.34.No.3、医学書院、1993